Hamletにおける不条理と統一精神

三　好　　弘

1

"Hamlet" 批評においては，昔からおびただしいアプローチの仕方があり，しかもその批評のいずれもが Hamlet の一面を把えているのであるが，作者 Shakespeare に果してそのような意識があったかどうかということになると，はなはだ疑問である。案外，作者は単にデンマーク王家の家庭的紛争を描くという意図以上のことは考えなかったかもしれない。

しかしながら，この作品が後世において，作者自身にさえ予想もされなかった別個の評価を受けている根拠には，いずれも客観性があり，決して作品にないものを後から勝手につけ加えたものでないことも事実である。これは，いわゆるジードの云う悪魔の協力であるが，この作品には特に悪魔の働く部分が多いことは否定できない。

このような作品の持つ多面性は，Hamlet があまりにも，いろいろのことを喋りまくる結果生じてきたように思われる。当時は，こうした雄弁家としての Hamlet が好まれていたのであるが[(1)]，1770 年以後，Hamlet の複雑性が指摘されるようになり[(2)]，19 世紀になるともっぱら批評は性格論にしぼられ，その最後の到達点は A. C. Bradley の悲劇論であった。

20 世紀には，社会的，歴史的研究によって新生面を開いているが，いずれも 19 世紀の主観主義と背馳する結論は出していなく，それらの研究の欠点を補っているものにすぎないと言えるだろう。

中には，背馳する結論を出す人もいる。主題の矛盾性を非難する中橋一夫氏[(3)]とか，情緒過剰または主題過多の理由で失敗作だと断じたT. S. Eliot がその人で

---

(1) Paul S. Conklin: *A History of Hamlet Criticism* (Routledge 1957), p. p. 8—9,

(2) ibid., p. p. 63—81.

(3) 中橋一夫:「道化の宿命」(研究社 34 年), p. p. 138—140.

ある。

まじりけが多いという意味では，確かにこの作品は純粋ではないが，全体が前向きであるという情緒によって統一されている以上，交響曲という大音楽から，罪ある母親に対する息子の心理という哀切な琴の曲だけを取出して，全体に不要の部分が多いとした点に問題が残る。

またテーマに矛盾があるとする説にも，筆者は共鳴できない。そのような思考の厳密さとか体系を文学に求めるのは不可能に近い。たとえ，作中人物が，人生，行動，死などについて哲学的思考をしたところで，文学の世界には，特有の不透明さや，あいまいさがあり，厳密性や体系に欠けているものである。

あまりにも，厳密な思考や明白な概念を作品にとり入れることは，作品の効果をそこない，自由な展開を不可能にして，作中の人物は予定のコースを歩むだけで，何の心の冒険も経験できない。

文学には，哲学と違って，魂の冒険が必要であり，人生の不透明，あいまいさ，矛盾，不偏，不予測性が，ある種の厚味によって描かれているものには，大きく心を動かされ，感動を経験しないではおられない。

「Hamlet」においては，こうした複雑な広い幅全体がその意味であり，その主題であるとする大山俊一氏の解釈は[(4)]，融通性があり，広い見方をしているように思う。氏は，この劇の悲劇を conscience の意識と良心の間に幅広い意味を持て余した男の悲劇として説いている。

筆者の考えはこれと異なり，人間の条件の中にある根源的なあいまいさがあるという不条理の言葉以外には，Hamlet の複雑性を的確に表現し得る言葉は見あたらないように思われる。

しかも，Hamlet にわだかまっている不条理だけが描かれているのではなく，人間の心の奥深くで叫んでいる明晰に対する激しい欲望が描かれているのだ。不条理と統一を欲する精神との対立。筆者は，これがおそらく Hamlet の思考の実体ではないかと愚考するのである。

2

いかなる人間にも，共通の人間性があるのではない。それぞれの状況にしたがって，人間は自らをつくりながら，存在し，行動を選択している。人間は，最初

(4)　大山俊一：「ハムレットの悲劇」（篠崎 38 年）p. 105.

からできあがっているのではなく，自分を創造していくものであり，それ以外の何ものでもない。

そして，人間が自己を発見するためには緊急事態が必要であり，文学とはこのような状況と自覚を描くものであると考えれば，人間がいかなる条件のもとに，いかに生きるかということが重要なポイントになるだろう。

そのような文学観から見れば，この劇においては，次の台詞が全篇を解釈する悲劇の原型として，相当の重要性を持っていると思う。

For he was likely, had he been put on,
To have proved most royally.
〔V, 2, 384—5〕

これは，多分作者が作品から離れて，主人公を振返ってみた台詞であろうが，この台詞によって，Hamlet が置かれた状況のもとに，何をいかに語り考えるかという心理の実体を把えてみることにする。

劇は最初すべてが平穏のように見える。しかし，少しずつ，何かふるいよせられてかたまっている白魚がいかにも崩れそうな予感を与えてくる。そして，そのかたまりから，最初に崩れるのは Hamlet である。

Hamlet は，深い悲しみに包まれて，喪服を着たまま塞ぎ込んで登場し，その悲しみは外観では表現できない深いものである。

Nor the dejected 'haviour of the visage,
Together with all forms, moods, shows of grief,
That can denote me truly.
〔I, 2, 81—3〕

何かに不満を持って，塞ぎ込んだりするのは，何かの対象が自分の気持に背くような存在の仕方をしているからである。Hemlet の場合，その対象とは何か。それは人間の在り方であろう。

Fie on't ! O fie ! 'Tis an unweeded garden
That grows to seed ; things rank and gross in nature

Possess it merely.

〔I, 2, 135—7〕

Hamlet が嘆くのは，すべて世の中が真でないことである。父王を亡くした悲しみが忘れられていること〔I, 2, 76—86〕，母の早すぎた再婚〔I, 2, 15—7〕，その相手がくだらない人であること〔I, 2, 151—3〕，過去の父に対する愛情を忘れたかのような母の変り方〔I, 2, 143—6〕，くだらない人が世の中を支配しているということ〔I, 2, 136—7〕，など，いずれも道理性とか真でないことが，大きく左右している。

Ophelia の台詞によると，Hamlet は万人の理想を象徴した人物である。

O, what a noble mind is here o'erthrown !
The courtier's scholar's, soldier's, eye, tongue, sword ;
Th'expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion, and the mould of form,
Th'observ'd of all observers, quite, quite down !

〔III, 1, 153—7〕

これは，表面の変化であるが，内面的にも，どうにもやるせない厭世感と砂をかむような虚無感が流れている。

O, that this too too solid flesh would melt.
Thaw, and resolve itself into a dew !
Or that the Everlasting had not fix'd
His canon 'gainst self-slaughter ! O God ! O God !

〔I, 2, 129—32〕

絶望のゆくてにある死が現実のものとして黒い顔を現わしていると言えよう。このような死のイメジがこの劇の主題だと断じる Wilson Knight 氏の説がある[5]が，筆者はむしろ死という危機意識で問題を把えることによってリアリティを強

(5) G. Wilson Knight : *The Wheel of Fire* (University Paperbacks 1960). p. 28.

く感じさせ，作品の質的向上に役立たせているテクニックの問題だと解釈する。

かって愛していた Ophelia を言々する場合も，Hamlet の台詞には，何かセンシュアルな感じがする。

> Let her not walk i'th'sun; conception is a blessing; but not as your daughter may conceive:-Friend, look to't.
>
> 〔II, 2, 184—6〕

一皮はげば，重苦しい暗黒な世界がどんよりとよどんでおり，自分をとりまくあらゆるものがすべて否定的であり，暗黒の激動の中で，復讐に集中したこともあった。

> O all you host of heaven! O earth! What else?
> And shall I couple hell? O, fie! Hold, hold, my heart;
> And you, my sinews, grow not instant old,
> But bear me stiffly up.
>
> 〔I, 5, 92—5〕

しかし，彼は，自分の根底から揺り動かされている意識を，人間のすばらしさに向けて夢想することもある。

> What a piece of work is a man! how noble in reason! how infinite in faculty! in form and moving how express and admirable! in action how like an angel! in apprehension how like a god! the beauty of the world! the paragon of animals!
>
> 〔II, 2, 295—9〕

規範と現実の間をさまよう彼の頭の中は，すべての問題が同時に押し寄せて，渦巻いているのだ。彼の思考は，一つのポイントに向っておらず，あまりにも複雑であり，本人自身も自分のメランコリーの原因は知らない。

> I have of late—but wherefore I know not—lost all my mirth, forgone all custom of exercises:

〔II, 2, 288—9〕

しかしながら，対社会的な方面では，誠実性のない変化に，するどい批判的な台詞を吐いている。

It is not very strange; for mine uncle is king of Denmark, and those that would make mows at him while my father lived, give twenty, forty, fifty, an hundred ducats apiece for his picture in little. 'Sblood, there is something in this more than natural, if philosophy could find it out.
〔II, 2, 346—50〕

この台詞が示すように，彼は規範で現実を批判している。規範は絶対であるから，妥協は許さないが，現実は批判の支配する世界である。

規範から現実を批判する時は，歯切れのよい響を感じるが，人間はかくあってほしいと考えるのと，人間がかくありうるのとは別問題である。人間が生きている以上，ある状態を持続することは不可能だ。

彼もその例外ではない。彼は，絶対的な規範の世界から，長所短所のけじめをつける現実の世界に自分を置いて自己反省し始める。彼の自己反省は，まず俳優の熱演を見て，悲しむべき動機がありながら，力のない自分に集中する。

yet I,
A dull and muddy-mettled rascal, peak,
Like John-a-dreams, unpregnant of my cause,
And can say nothing:
〔II, 2, 540—3〕

そして，劇中劇で王の心を試すことに元気さをとりもどし，そのことに意識は集中して，どことなく決心めいたところがあるが，その次に彼が登場してくると，彼の心は依然として複雑さをきわめている。

To be, or not to be;—that is the question:

Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing end them?
〔III, 1, 56—60〕

このような Hamlet の変化は，作者一流の人間の把え方であろう。型にはまった言葉や動きだけでは，芸術的な感動をひき起すことはできない。復讐を決意しても，何事にも動じない，錯乱しない鉄のような意志と冷静な判断力を持った Hamlet ではない。まさに人生のドラマだ。

この台詞は，構成上から考えても劇の中間にあるばかりでなく Hamlet の思考方法においても大きな分岐点となっている。今まで彼が，夢想にみちた憂愁で現実を否定し，どろどろした粘体の不安と不満のポエジーの美しさを示して，その粘体性の中で集中しょうとしていたことは明らかである。

ところが三幕になると，彼の意識をゆさぶる数々の問題を一応整理して，あれかこれかという思考形式に変化しているのは注目すべきものと思われる。

そして，対象によって自分を反省していた Hamlet は，自分の中にある罪に気付くだけでなく，Ophelia の前で自分の正体を暴露するようになる。

I am myself
indifferent honest; but yet I could accuse me of such things that it were better my mother had not born me; I am very proud, revengeful, ambitious; with more offences at my beck than I have thoughts to put them in, imagination to give them shape, or time to act them in.
〔III, 1, 122—7〕

自分がかくあるべき人間，つまり理想的な人間でないばかりか，いざという時に悪人になりかねないと言うのは，人間には不測の変があり，何時でも悪人にな資格を持っていることを意味するもので，ペスィミスティクな人間観だと言える。

We are arrant knaves all; believe none of us—go thy ways to a nunnery. Go thy ways to a nunnery. Where's your father?

〔III, 1, 129—30〕

これは人間不信の台詞であろう。彼は女性を特に嫌っており，それは母の問題からくるものであろうが，裸を覆う飾りに頼って，真実でないことを憤る。

これは，人間一般に言えることで，一見簡単なようであるが，非常に難かしい問題である。人間は誰でも自己惚れがあり，己のことは寛大な目で見て，欠点や罪を見ないようにしがちである。

だから，正直に語る勇気がないと，Hamlet のように自分の正体を暴露できない。自分に対して罪深いと人の前で言える Hamlet は，正直で勇気のある人物である。

これは誠実であるために避けられなかった結果であるが，人間性の重大な暗黒面を深刻な内省の眼によって知った Hamlet は，劇の最初のように自分が絶対正しいと考えていた彼ではない。自分が罪人であると感じるのと絶対に正しいとでは，雲泥の相違である。

Hamlet は，自分が罪人だと感じているから，Ophelia を咎めるにしても，自分を顧みながら咎めているような，何処となく寛大さが感じられる。卑劣の高さから語っているのではない。

Wilson Knight 氏は，この場面の Hamlet は彼女に残酷である[(6)]と解釈しているが，必らずしもそうとは言えないのではあるまいか。ここのところの Hamlet の台詞は，静かで，感情的でなく，寛大さで悟らせているように感じられる。ただ，Hamlet は真実でありたいがために，馴合いによる人間関係はできないから，前と同じような気持で愛することができないと語ったことは，無知な彼女には残酷と言えば残酷だが，彼女にしたって，国王と父に方法を教えられて Hamlet を試しているのであるから，当然彼女の無知は責められて然るべきだろう。

馴合いが支配している状況にあって，国王のあやつる役割を演ずることだけに，あまりにも汲々としている間で，真実でありたい，そのように生きたいと思っても，挫折があるのみだろう。そして，そのようなどうしょうもない挫折から，どうにかして自分なりに立ち直らなければならないと集中する Hamlet は，Horatio の情熱と分別力がうまく調和している点に心を魅せられる。

---

(6) ibid., p.26.

Horatio, thou art e'en as just a man
As e'er my conversation cop'd withal.
〔III, 2, 49—50〕

そのようなバランスを得たHoratioを羨望するのは，彼が激情に傾き易い自分自身を知っているからであろう。彼は懸命に統一し集中しょうとするが，それができないために横道にそれる。これは，渾沌たる存在論とか人間のセンシュアリズムがそれをさまたげるからである。

その点，D. A. Traversi 氏が，この作品に人間の経験として避けられない肉体に気付いたことは注目すべきだ[(7)]と言っているのは，共鳴できる説であろう。

すべて，生身の人間であってみれば，絵のように理想像を停止させて定着することができないから，刻々に移り変ってしまう。愛情もその例外ではない。愛の無常は劇中劇にうまく繰返されている。

I do believe you think what now you speak,
'But what we do determine, oft we break.
〔III, 2, 175—6〕
'This world is not for aye, nor 'tis not strange
'That even our loves should with our fortunes change.
〔III, 2, 189—90〕

劇中劇によって，国王の心の裡を探ったHamletは歎喜し，Horatioとはまともに語り合うが，国王にあやつられているRosencrantzとGuildensternには，自分の心中をあかさない。彼は，自分を吹き鳴らして秘密の中味を探ぐろうとする二人に怒りの台詞を投げつける。

次にHamletが登場するのは，例の有名な国王の祈っている場面である。しかし，国王の台詞は，あまりにも言葉数が多く，真剣さに欠けており，国王自身はそのことを意識している。

My words fly up, my thoughts remain below;

(7) D. A. Traversi: *An Approach to Shakespeare* (Anchor 1956), p. 99.

Words without thoughts never to heaven go.
〔III, 3, 97—8〕

Hamlet は，本当に心から祈っていると判断し，魂を浄めている時に殺せば復讐にならないと思って，もっと忌わしい機会を待ち，天国へ行かせないように決心して，次のように命をのばすのは苦しみを延ばしてやるのだと悪魔的な台詞を吐く。

This physic but prolongs thy sickly days.
〔III, 3, 96〕

この悪魔性を無視して，G. R. Elliott 氏は完全な人間として解明しているが[8]，そのような要素が依然として描かれている限り，それをどのように解釈すべきかの問題が残る。だからと言って，17 世紀のように，悪意のある Hamlet としてのみ解釈するのも[9]一方的であろう。

もちろん，Hamlet は蔭で声がしただけで刃で殺してしまう。ここのところは，理解できないという人が多いが，筆者は，これほど人間の不条理性のすばらしさを表現したものは，当時の作品の中で，その例を知らない。審美的感動，つまり額面価値で受ける行動のすばらしさを表現したものだろう。

Hamlet が本来的な行動をするだけに描かれていたら，おそらく，つまらない道徳を宣伝するようなものになっていただろう。道徳的に生きようと思いながらも，悪魔性を示したり，罪を犯したりするという人間の不条理を見事に把えているのは驚くべきことだ。

人間は天使のように行動しょうとしながら獣のようなこともする。自分の欲するものとはまるで違った，時には正反対の行動もしかねない奇怪な存在である。ほとんど，人間が必然の道を歩くのは稀で，それから離れがちである。善人悪人という人間の型はない。どのような人でも五十歩百歩である。人間の不透明さ，あいまいさが見事に把えられているこの劇は，理念に酔って上を向いているような作品ではない。

しかしながら，Hamlet がこのことによって，国王と同じような罪を犯したこ

(8) G. R. Elliott: *Scourge and Minister* (Duke U. P., 1951)
(9) Paul S. Conklin: *A History of Hamlet Criticism* (Routledge 1957), p. 14.

とは事実であり，自分でもそれを認めている。

A bloody deed ! Almost as bad, good mother,
As kill a king, and marry with his brother.
〔III, 4, 27—8〕

福田恒存氏は，本来の宿命とは無縁の時，Hamlet はそのような行動を軽快にする[(10)]と解釈しているが，これは宿命に無縁だと知って殺したのではなく，誤殺である。

I took thee for thy better; take thy fortune;
Thou find'st to be too busy is some danger.
〔III, 4, 32—3〕

Hamlet は，当然の死だと言わんばかりに，直ぐ母に向って，分別心のないことを責めたりして，かなり混乱している。

You cannot call it love, for at your age
The hey-day in the blood is tame, it's humble,
And waits upon the judgement; and what judgement
would step from this to this?
〔III, 4, 68—71〕

しかし，そのあとで，Hamlet は母に悔い改めることを勧め，神に祈るようさとす。

Confess yourself to heaven;
Repent what's past; avoid what is to come.
〔III, 4, 149—50〕

(10)　福田恒存：「西欧作家論」（創元社24年），p. p. 25—6.

一方，Hamlet 自身も心をとりもどして，Polonius を刺殺したことの罪を認め，神の力に縋って，立ち上ろうとする。

I do repent; but heaven hath pleased it so,
To punish me with this and this with me,
That I must be their scourge and minister.
I will bestow him and will answer well
The death I gave him.
〔III, 4, 173—7〕

しかし，これによって，Hamlet が泥沼から浮び上ったとは言えない。この後で直ぐ彼は今までのことを打消して，ひどく残酷な言葉を吐くからだ。

Not this, by no means, that I bid you do:
Let the bloat king tempt you again to bed;
Pinch wanton on your cheek; call you his mouse.
〔III, 4, 181—3〕

母を観ているうちに信じ切れなくなった Hamlet ロマンスの愛の世界を信じ切れなくなってしまった Hamlet には，センシュアルな愛だけしか見えない。

Hamlet の予感は当った。母は国王の前に出ると，あの良心の苦しみは何処かに消えてしまっているではないか。もうろうとした思惟，道徳，人間関係，生活態度，それらが相も変らず愚劣さの繰返しで，何もかも空しく思われてくるのは Hamlet だけの問題ではあるまい。

Hamlet は，自分自身と自分の状況に対して明晰であろうとし，そうすることによって，統一体たる人間になろうとしてもがいている。絶対の世界は，存在しながらも実存しない。しかし，存在するということは現実の世界の条件である。そして，その条件を満たす方法は行動すること以外にはない。Hamlet も，人間としての偉大なことは行動であることに気付く。

Rightly to be great
Is not stir without great argument,

But greatly to find quarrel in a straw
When honour's at the stake.
〔IV, 4, 53—6〕

あれかこれかという思考から行為の重要性を認識した Hamlet は，無分別も立派に役立つことを経験する。

Rashly,—
And praised be rashness for it, let us know,
Our indiscretion sometime serves us well
When our deep plots do fail.
〔V, 2, 6—9〕

そして，最後に神の仕事と人間の仕事を区別して，自分の後に神がついていてくれるという，規範の象徴がたどる運命さながらに，神意にすがるのである。

……and that should learn us
There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will.
〔V, 2, 9—11〕

規範と現実の相克を救うものは何か。その一つの答えとして，Hamlet は神を提唱する。性善説の人間観から出発して，人間に疑問を抱き，あれかこれかという二分的な思考に進み，行動の重要性を認識し，最後に神と人間の限界線を引くという大きな論理の流れを Hamlet の思考の複雑性の中で把えようと試みたが，その論理はいたるところで，否定されている。

人間の不条理性を統合することは不可能に近い。よくなろうとしながら，どんなに獣性の泥沼に深くはまりこんでいるかを Hamlet のもがきを通して考えずにはいられない。この作品は人間の獣性を見ると同時に神性を見ることを願う作品であり，これこそわれわれ精魂を傾けて没頭すべき作品と言える。

筆者が提唱した不条理と統一精神は，作者が個人的な悩みや苦しみを深く掘り下げた結果，無意識に描かれていた要素であろうが，全面的な人間を求めている

という意味で，この作品は，“Macbeth,” “King Lear,” “Othello” の三大悲劇よりも近代的な意味をもつ詩劇ではなかろうか。

Hamlet の置かれた状況は，自分の意志とは無関係に自分の欲しない状況に置かれた現代人に共通な運命であり，また科学万能の環境の中で分裂し，それを統合しようともがく現代人と同じであると言える。だから，現代とのつながりにおいて，この作品は生きており，古典としての現代的意義をわれわれは再認識すべきである。